

講演会
「アートと材料
—東京科学大学で窯業・民藝を考える—」

主催：無機材会／協力：物質理工学院 材料系 無機材料分野、リベラルアーツ研究教育院



日時 2025年1月25日(土) 午後2時～4時

参加無料／要事前登録／対面とオンラインのハイブリッド方式／
終了後、会場にて懇親会を開催(1時間程度)

会場 東京科学大学 大岡山キャンパス 南7号館2階 201/202号室

講師 佐々風太(東京科学大学 リベラルアーツ研究教育院 研究員)

上図：河井寛次郎《華花文風瓶》(東京科学大学博物館蔵)／写真提供：東京科学大学博物館

事前登録はこちら



(<https://forms.gle/vDng1ax1vXrN8c519>)

アートと材料

—東京科学大学で窯業・民藝を考える—

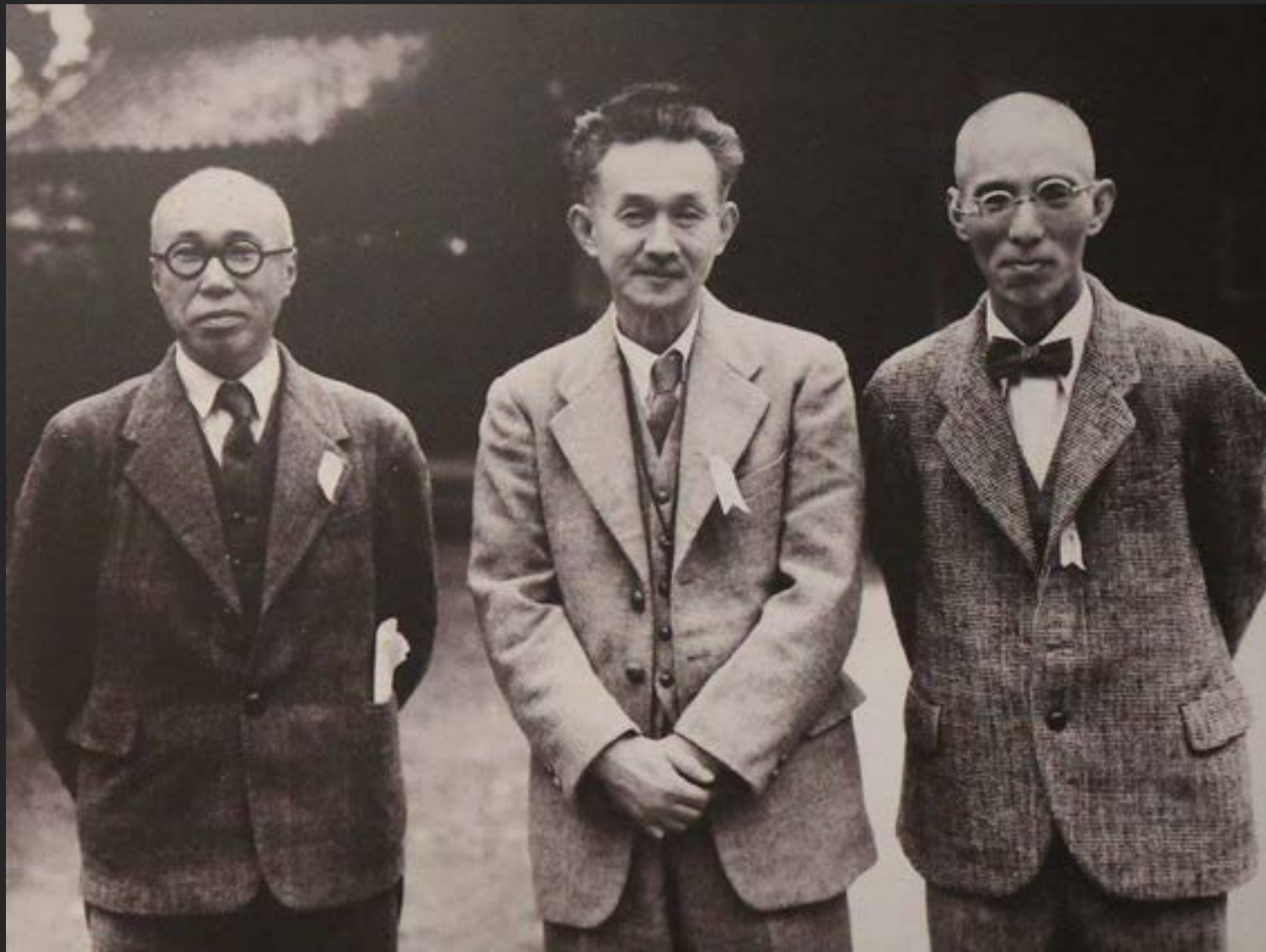
東京科学大学リベラルアーツ研究教育院研究員

佐々 風太

2025年1月25日

- 1 「民藝」とは何か
- 2 民藝運動を準備した場としての東工大
- 3 美の探究—近代科学を超えて
- 4 アートと材料—塩釉を例に
- 5 まとめにかえて

1 「民藝」とは何か



(左から) 濱田庄司、柳宗悦、河井寛次郎

* 画像引用元：濱田庄司『窯にまかせて』日本経済新聞社、1976、101頁



焼締黒流茶壺（信楽） 日本民藝館蔵

* 画像引用元：日本民藝館ウェブサイト
(https://mingeikan.or.jp/collection_series/japan_ceramic/)

- ・ 1925年、柳・濱田・河井が「民藝」（民衆的工藝）の語を創案

- ・ 柳宗悦「雑器の美」（1926年初出）

「毎日触れる器具であるから、それは実際に堪へねばならない。弱きもの華やかなもの、込み入りしもの、それ等の性質はこゝに許されてゐない。

〔略〕華美ではない。強く正しき質を有たねばならぬ。それは誰にでも又何時でも又如何なる風にも使はれる準備をせねばならぬ。装ふてはみられない。偽ることは許されない。いつも試練を受けるからである。正直の徳を守らぬものは、よき器となることが出来ぬ。工藝は雑器に於て凡ての仮面を脱ぐのである。」

（『柳宗悦全集』第8巻、筑摩書房、1980、17—18頁）

- ・ 『日本民藝美術館設立趣意書』（1926年）



スリップウェア（イギリス）

濱田庄司記念益子参考館蔵



呉須鉄絵撫子文石皿（瀬戸）

日本民藝館蔵

* 画像引用元：

(左) 世田谷美術館編『没後40年濱田庄司展』世田谷美術館、2018、31頁

(右) 日本民藝館ウェブサイト (https://mingeikan.or.jp/collection_series/japan_ceramic/)



蓮葉型狗足膳（朝鮮半島） 日本民藝館蔵

* 画像引用元：日本民藝館ウェブサイト
(https://mingeikan.or.jp/collection_series/korea_sculpture/)



木綿切伏衣裳（北海道、アイヌ民族） 日本民藝館蔵

* 画像引用元：日本民藝館ウェブサイト
(https://mingeikan.or.jp/collection_series/japan_ainu/)

沖縄染織の例（柳宗悦）



紺地経縞に緋袷衣裳

日本民藝館蔵

* 画像引用元：日本民藝館ウェブサイト

(https://mingeikan.or.jp/collection_series/japan_okinawa/)

その古着市を見た途端、私の目は輝いた。殆ど凡てが純粹の沖縄のもので、何もかも手織、草木染のものではないか。島で作られたものである限り、一つとしていやなもの、俗な品、まがひものは無いのである。〔略〕

私は古着を売るお婆さん達と、間もなく親しくなつた。又私のやうに日参した者もないかも知れぬ。私の姿が現れると、方々から声がかゝる。「やあたい、かうみさうれ」。「やあたい」は「ようてい」とも聞える。もしくはといふ呼びかけである。「かうみさうれ」は「買ひ召し候へ」の沖縄音で、誰も知る通り、沖縄では日本の鎌倉足利時代の日用語を今も用ゐる。だから候文なのである。今も私の耳の底に、その声が響くのを感じる。

（『蒐集物語』、1956年初出）

（『柳宗悦全集』第16巻、筑摩書房、1981、648-650頁）

古民家の例（濱田庄司）



濱田庄司記念益子参考館4号館、通称「上ん台」（発表者撮影）

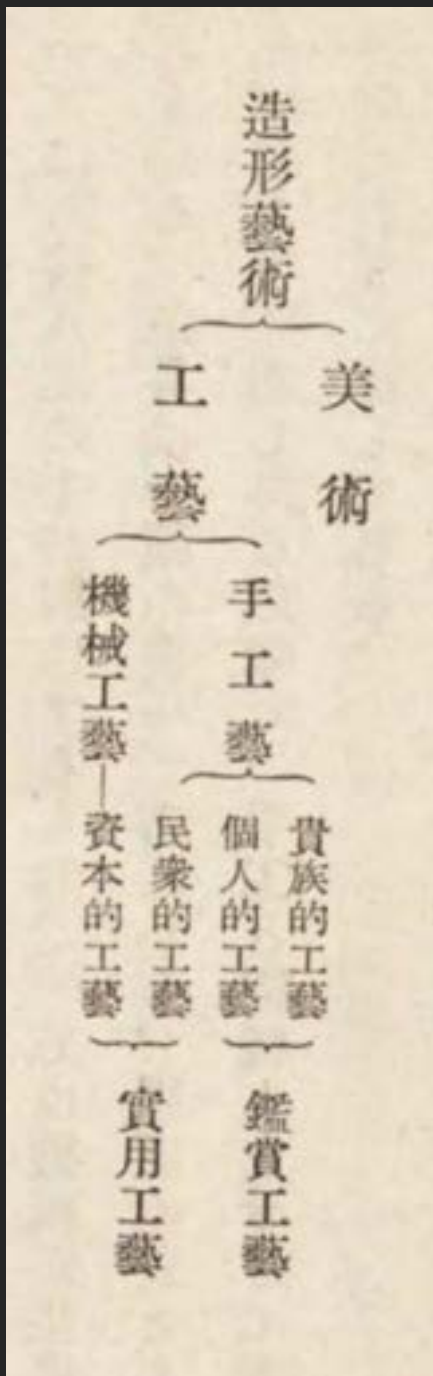
益子で驚いたのは、大きな農家の構えであった。どの家でも松の梁や、檜の大黒柱を使っていてその素晴らしさがたまらなく羨ましかった。何とかして一軒求めたく、脚に委せて四、五里の範囲を、売る売らないは問わず、好きなものを食べるように歩き廻った。〔略〕

私は、この四十数年の間に、ずいぶん多くの家を建ててきた。先日、小学生の孫が、物置や漬けもの小屋までを含めると、十九棟になると数えあげていた。

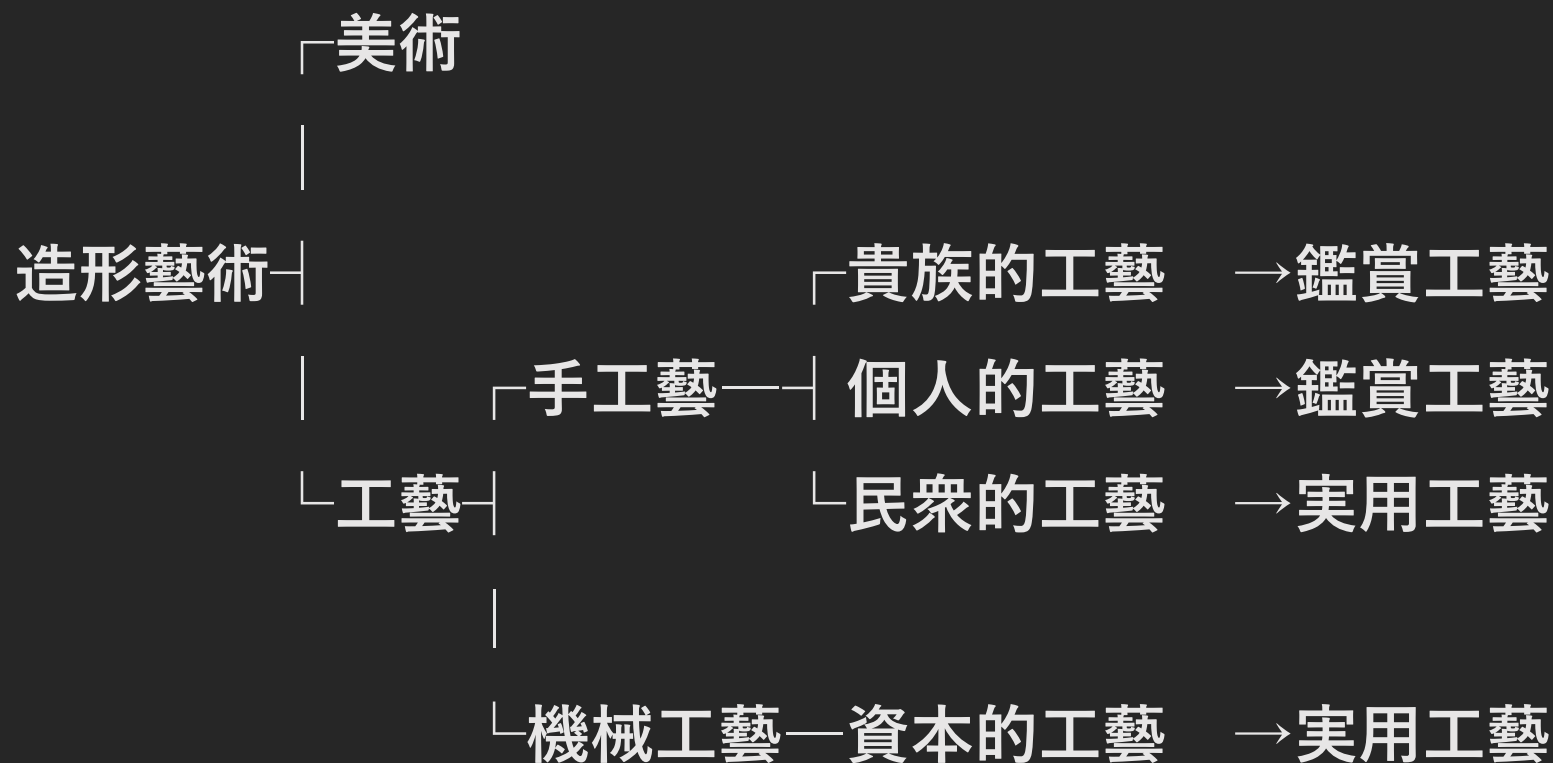
もともと田舎が好きで、できたら農家に住みたいと思っていたから、多くは益子周辺の古い農家、といっても江戸末期から明治初期にかけてのものを求め、移築したものである。

よそ者には部屋さえ貸せぬといった古い生活のかたちがそのまま残っていた当時の益子のことであるから、先祖伝来の家を求めるのは、なかなか容易ではなかった。

(濱田庄司『無尽蔵』朝日新聞社、1974、312—313頁)



* 画像引用元：柳宗悦『工藝文化』
 文芸春秋社、1942、35頁





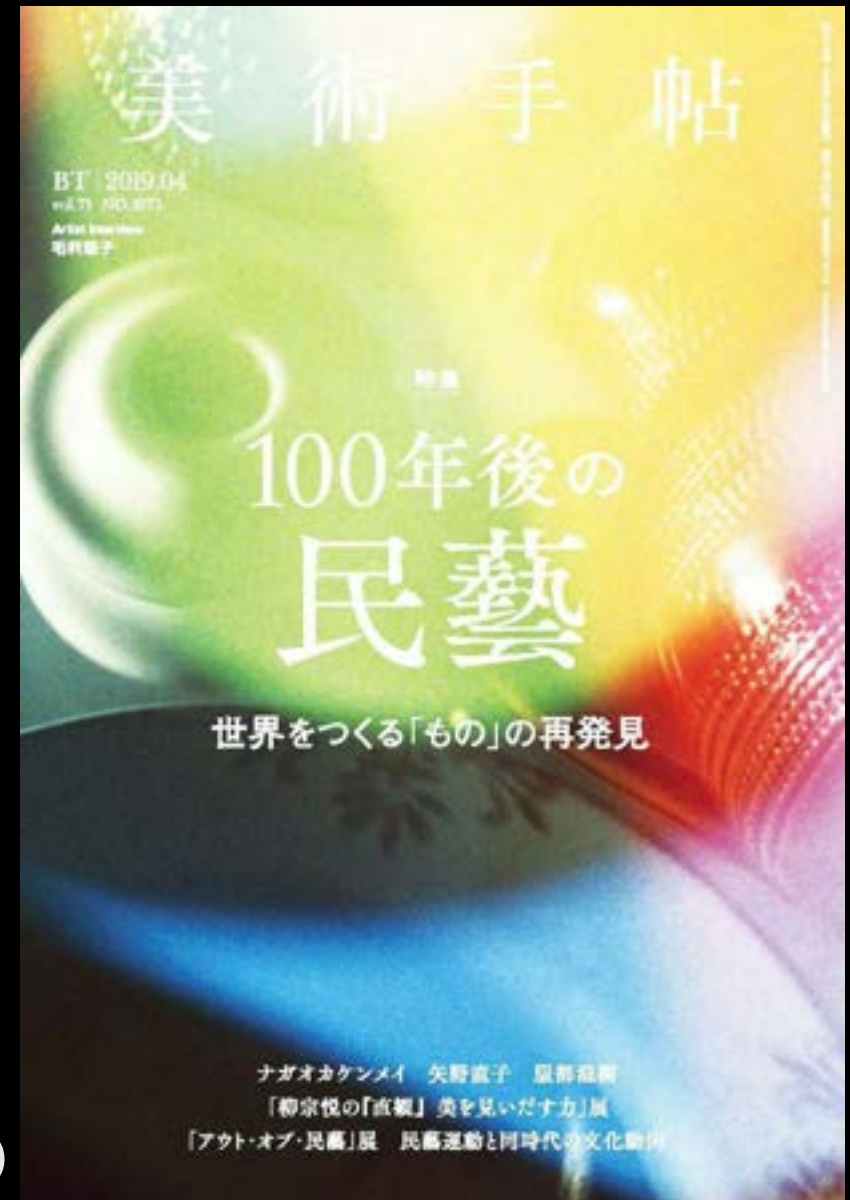
柳家食卓（現・日本民藝館西館）：作家作品や各地の民窯の品が用いられている。

* 画像引用元：日本民藝協会ウェブサイト
(<https://www.nihon-ningeikyukai.jp/ningeikouza2023/>)



日本民藝館

* 画像引用元：日本民藝館ウェブサイト (<https://mingeikan.or.jp/floormap/honkan/>)



美術手帖編集部編 『美術手帖』
美術出版社、2019
(2019年4月号、特集「100年後の民藝」)

民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある

2025 2/8 SAT - 4/6 SUN

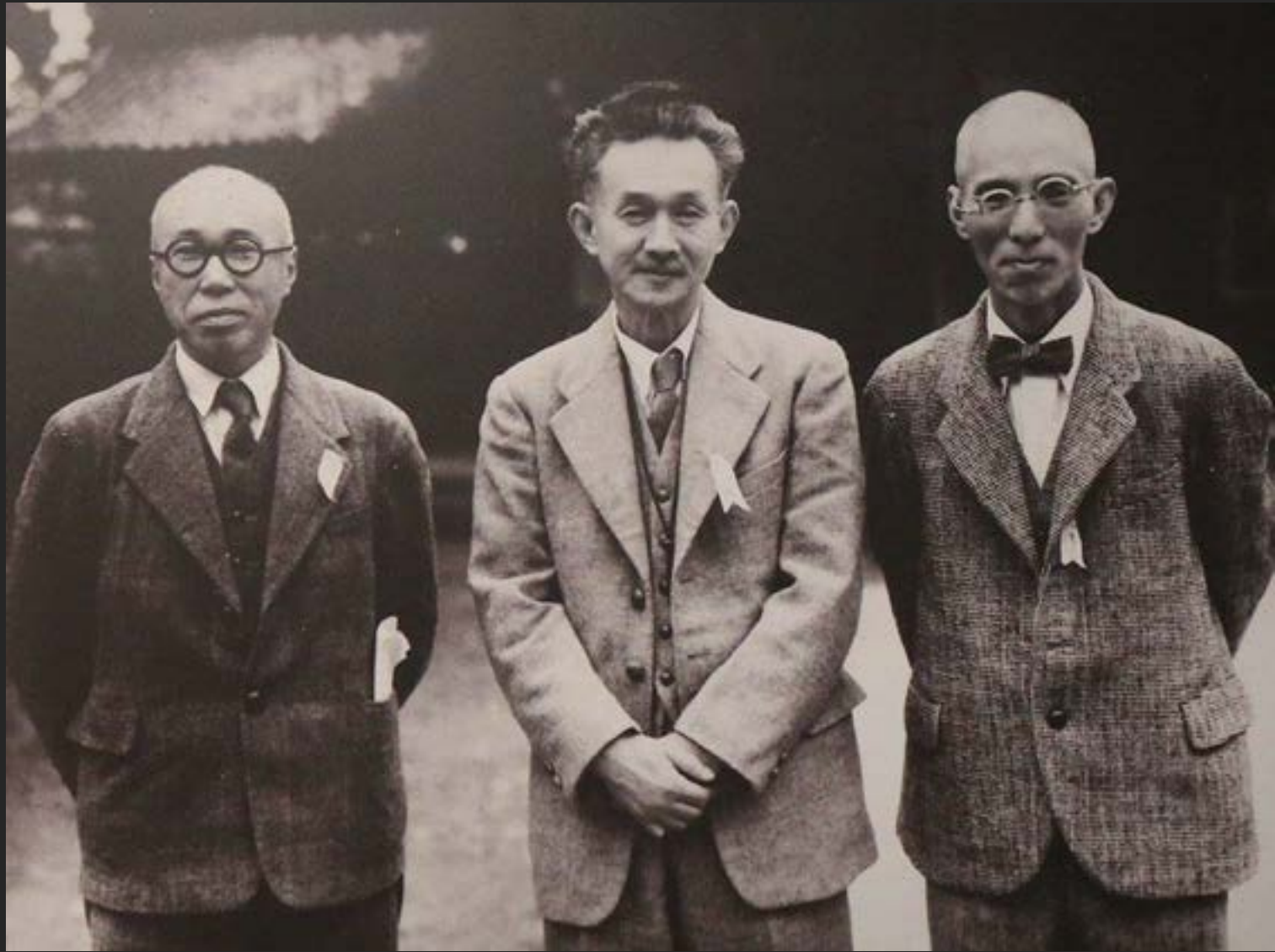
福岡市博物館
Fukuoka City Museum
[シーサイドもち・福岡タワー南]

スリップウェア陶文鉢
イギリス 18世紀後半 日本民藝館蔵
Photo Yuki Ogawa



「民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある」展
（大阪中之島美術館から全国巡回、2023年—2025年）

2 民藝運動を準備した場としての東工大



(左から) 濱田庄司、柳宗悦、河井寛次郎

* 画像引用元：濱田庄司『窯にまかせて』日本経済新聞社、1976、101頁

- ・ 東京職工学校 創設（1881）

ワグネル「窯業学」（科目）設置、「陶器瑠璃工科」主任

- ・ 東京工業学校と改称（1890）

「陶器瑠璃工科」→「窯業科」

- ・ 東京高等工業学校と改称（1901）

「窯業科」

- ・ 東京工業大学に昇格後（1929～）

「窯業学科」ほか

- ・ 戦後の組織改編などを経て、「無機材料工学科」ほか

- ・ 現在、東京科学大学 物質理工学院 材料系 無機材料分野



東京高等工業学校校舎（蔵前）

* 画像引用元：『東京高等工業学校一覽 從大正五年 至大正六年』東京高等工業学校、1916



河井寛次郎（1890—1966）

（東京高等工業学校 窯業科／1910年入学・1914年卒業）

* 画像引用元：河井寛次郎記念館ウェブサイト（<http://www.kanjiro.jp/profile/>）



河井寛次郎 《草花文扁壺》 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、5頁



河井寛次郎 《辰砂釉扁壺》 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：文化遺産オンライン（<https://bunka.nii.ac.jp/>）



河井寛次郎の在学時ノート 河井寛次郎記念館蔵

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、4頁



濱田庄司（1894—1978）
（東京高等工業学校 窯業科／1913年入学・1916年卒業）

* 画像引用元：NHKウェブサイト（「あの人に会いたい File No. 94」）
（https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009250094_00000）



濱田庄司 《柿釉鉄絵青差大鉢》 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、7頁



濱田庄司 《鉄絵角瓶》 大阪市立東洋陶磁美術館蔵

* 画像引用元：世田谷美術館編『没後40年濱田庄司展』世田谷美術館、2018、50頁



『浅草文庫』（36号、濱田庄司による表紙絵） 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、26頁

- **第一学年**

数学（週二時間）、物理学（週四時間）、無機化学（週三時間）、有機化学（週三時間）、機械製図（週五時間）ほか

- **第二学年**

機械学（週二時間）、地質学（週二時間）、冶金学（週二時間）、燃料燃焼装置・石炭ガスなど（週二時間）、陶磁器（週二時間）、ガラス・ホーロー（週二時間）、機械製図（週五時間）、物理実験（週三時間）、工場実修（週一〇—一二時間）ほか

- **第三学年**

機械学（週三時間）、応用物理化学（週一時間）、築窯製図（週五一六時間）、工場実修（週一六一二〇時間）ほか

- **「実修工場設備」**

「原料粉碎水簸及機械轆轤成形室」や「原料分析室」「瓦斯分析室」、窯場ほか

（『東京高等工業学校一覽 從大正二年 至大正三年』
東京高等工業学校、1913）

- 「工業ニ従事スル者ノ為ニ必要ナル学理及技術ヲ教授スル」
ことを目的する
- 〔例：濱田庄司の入学時点〕
窯業科、色染科、紡織科、応用化学科、電気化学科、
機械科、電気科、工業図案科、建築科

（『東京高等工業学校一覧 従大正二年 至大正三年』
東京高等工業学校、1913）

補足① 工業図案科



杉山寿栄男 《上古時代飾馬図》 東京国立博物館蔵（発表者撮影）



芹沢銈介（1895—1984）

（東京高等工業学校 工業図案科／1913年入学・1916年卒業）

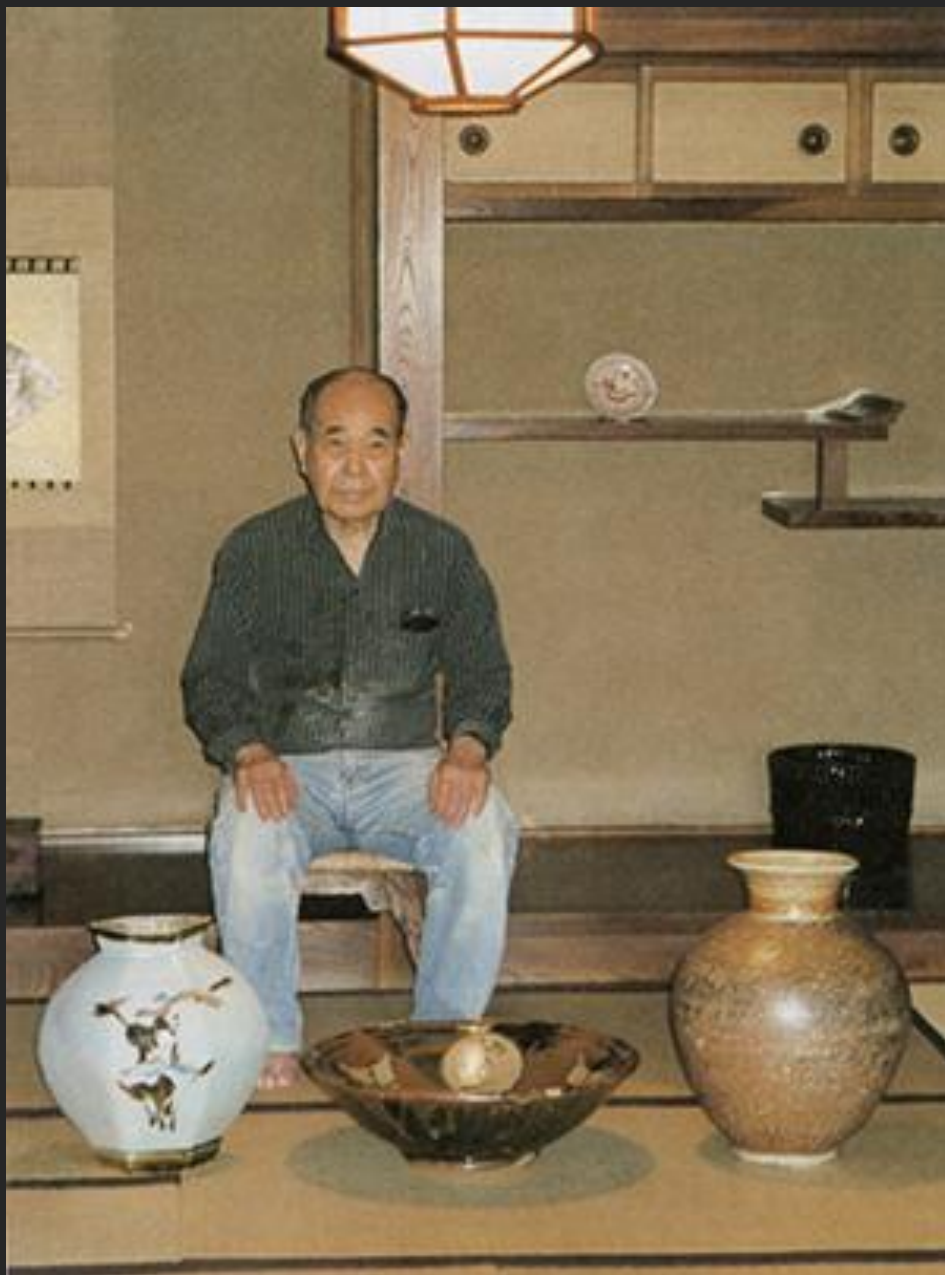
* 画像引用元：静岡市立芹沢銈介美術館ウェブサイト (<https://www.seribi.jp/serizawa.html>)



芹沢銈介 《型染カレンダー》 東京工業大学博物館蔵

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、9頁

補足② 窯業学科と島岡達三



島岡達三（1919—2007）

（東京工業大学 窯業学科／
1939年入学・1941年卒業）

* 画像引用元：東京科学大学博物館ウェブサイト

（<https://www.cent.titech.ac.jp/DigitalCollections2013/SHIMAOKATatsuzoCollections/SHIMAOKAtencatalog.html>）

島岡達三初窯展

素木洋一

東京工業大学窯業学科を卒業した島岡君が、敗戦の痛手にも屈せず、また、それといったつながりをも工芸界にもたずに、製陶という極めて内省的な仕事に没入して以来十余年の研究成果を、東京でも口やかましい文化人の密集する荻窪で発表した。作品は主に日用食器類に限られていたが、私がこの作品展を手にした時にまず異様な感に打たれたことは、あの益子産という極めて貧弱な原料を掌中の珠とした技術である。いままで益子の「やきもの」といえば何か厚ぼったい感

てのぞき出た古典へのノスタルジーは、さらに新時代への飛躍にそなえての仕事の道程とも見られるが、思いきって強調されてもよかったのではなかろうか——1点位このような作品もありたかったと思う。

作品の光彩に師の息ぶきにまだ重々しくよりかかっている安らかさは、造形美術とちがってそう容易には除き得ないことは百も承知であるが、これは次期の個展に見られることを期待しよう。

黒の階調から青緑色の淡い色調にいたる一連の釉薬には、まだ技術的綜合を研究する過程があるように思われる。偶然を期待することはすくなくとも氏のような高温化学反応を習得した技術者にとっては邪道であることは当然であるが、例えば水蒸気を多くかぶったと思われるような作品に愛着をいだけ好事家の満足を買うようになると、結局は先人のふんだ道を繰返すた

素木洋一「島岡達三初窯展」、『窯業協会誌』(694号)

公益社団法人日本セラミックス協会、1954、286頁



島岡達三 《地釉象嵌縄文番茶器》 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：文化遺産オンライン（<https://bunka.nii.ac.jp/>）



島岡達三 《地釉象嵌縄文壺》

茨城県陶芸美術館蔵

* 画像引用元：茨城県陶芸美術館デジタルアーカイブ

(<http://www.reserch.tougei.museum.ibk.ed.jp/viewer/archive.html?id=75&g=129>)



『余白』2号（東京工業大学・中島岳志研究室、2024）

特集「東工大と民藝」

3 美の探究—近代科学を超えて

河井寛次郎の場合



河井寛次郎 《青瓷鱈血文桃形注》
京都国立近代美術館蔵



河井寛次郎 《白瓷繡花六方花餅》
京都国立近代美術館蔵

* 画像引用元：独立行政法人国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム
(<https://search.artmuseums.go.jp/index.php>)

材料と技術とさえあれば、どこでも美しい物が出来るとでも思うならば、それは間違いであると思う。

人は物の最後の効果にだけ熱心になりがちである。そして物からは最後の結果に打たれるものだと錯誤しがちである。しかし実は、直接に物とは縁遠い背後のものに一番打たれているのだという事のこれは報告でもある。

(河井寛次郎『火の誓い』〔1953初出〕
講談社文芸文庫、1996、11頁)



河井寛次郎 《鉄薬筒描草花文鉢》
京都国立近代美術館蔵



河井寛次郎 《鉛釉白流蓋付壺》
京都国立近代美術館蔵

* 画像引用元：独立行政法人国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム
(<https://search.artmuseums.go.jp/index.php>)



河井寛次郎 《草花文扁壺》 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、5頁

学生の頃に私がきらった学科が、その後、さて陶器を作り出してから、一番役に立ちました。いったいに、今の美術教育では、科学の基礎的訓練をふまないことが欠点になっていますが、私なども、もし高等工業学校で科学を通してこなかったら、しようもない者になっていたろうと思います。

(河井寛次郎「機械は新しい肉体」〔1976〕、
『蝶が飛ぶ 葉っぱが飛ぶ』講談社文芸文庫、2006、18頁)

父は蔵前工業学校（今の東京工業大学）の生徒であった時、腕を鍛えるためのポートルースと新陰〔しんかげ〕流の剣道や謡〔うたい〕に励んでいたようだ。

窯業科に欠かすことのできないサイエンスは苦手のようなだったと母から聞き及んだことがある。「父さんはね、アンモニアの燃える美しい紫の焰に魅入られて、肝心の化学分子式を忘れてしまう程」だった由。

さもあらん、遺伝的にいっても、私は数学系のものは先天的だめ人間で、代数、幾何などは、まったく興味皆無。赤点をもらって、しょんぼりしていた時のこと、父曰く、「悲観することはないさ。かつて父さんはね、好きでない嫌いだった学科が、後年一番役に立ってくれたんだ。今でも唯一頼りになってくれているんだよ。不思議なものさ、安心したかい？」と。

私はすぐには承服しかねたが、そのうち父の言葉を思い出し、あんまり好きになれなかったが、嫌いとは思わなくなっていた。

（河井須也子「かの日のことども」、
河井寛次郎記念館編『新装版 河井寛次郎の宇宙』講談社、2014、103頁）

濱田庄司の場合



板谷波山（1872—1963）
（東京高等工業学校 窯業科 嘱託教員／1903—1913年）

* 画像引用元：板谷波山記念館ウェブサイト (<https://www.itayahazan.jp/>)

・「その頃学校は、新学期が九月から始まりましたが、始まると、まっさきに先生の家にかけてたところ、まだ暑い最中なのに、仕事場はピタツとしめきっておられて、洗濯したてのシーツでも仕事着でも、やりかけの壺を包んでしまって、それにホコリがつかないようにしてありました。自分は将来、一寸の破片が出て、これは波山のものだとわかるような品物がつくりたい、こういうことを言われました。」（濱田庄司『無尽蔵』朝日新聞社、1974、113頁）

・「板谷先生の仕事場は、シーツでもシャツでも白い布のものが洗濯屋から出来てくると先ず磁器大壺などを包んで汚れを防ぐ」、「戸もしめて夏でも暑い所で、長くかかるレリーフを……彫りに一か月以上かかるそうです」（杉浦澄子『陶芸家との対話 下』雄山閣、1975、219頁）。

・「彩磁」や「葆光彩磁」といった板谷の代表的な技法を、濱田が見た可能性



板谷波山 《葆光彩磁珍果文花瓶》 泉屋博古館東京蔵

* 画像引用元：泉屋博古館東京ウェブサイト
(https://sen-oku.or.jp/program/20221103_itayahazan_t/)

- ・〔濱田と杉浦澄子の対談：〕

濱田 板谷先生は意志の人ですね。愛して品物を作る人でなくて、希望があって、意志でもって片づけたという感じですね。

杉浦 作品からもそれはよくわかりますね、冷たさというか、まあ青磁とか彩磁とかの材質にもよりますでしょうけど……。

濱田 板谷先生は実際にいい方でふだん話をしたりすると楽しいんです。しかし出来たものにはなにかもの足りない。

（杉浦澄子『陶芸家との対話 下』雄山閣、1975、222頁）

- ・「今では〔引用者注・板谷とは〕別の考えを持つようになりました」

（濱田庄司『無尽蔵』朝日新聞社、1974、113頁）



濱田庄司 窯業科在学時作品か

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、6頁



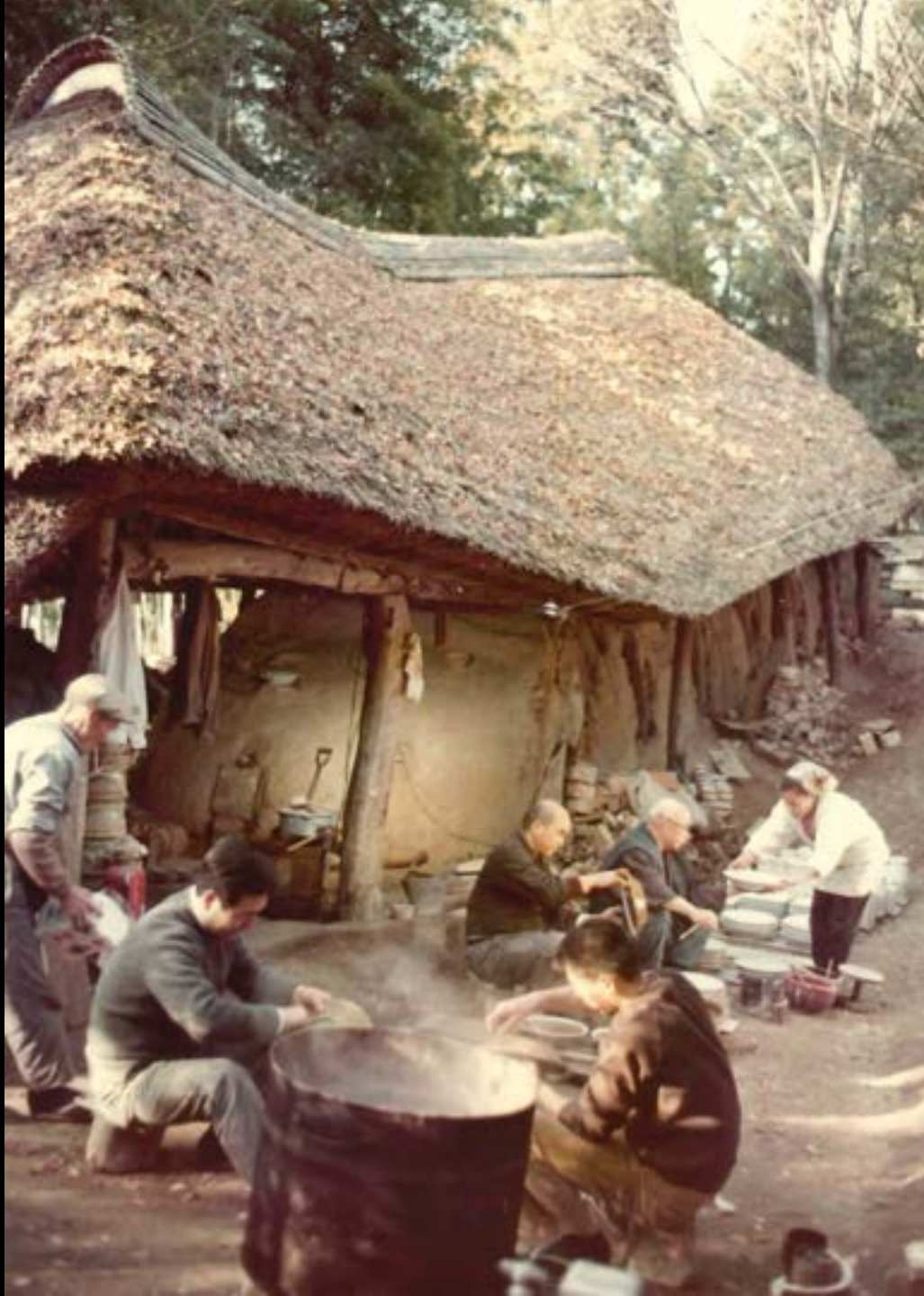
濱田庄司 《白釉透彫香炉》（京都市立陶磁器試験場時代）

* 画像引用元：東京国立近代美術館編『濱田庄司展』日本経済新聞社、1977、43頁



濱田庄司（イギリス時代）

* 画像引用元：濱田庄司『窯にまかせて』日本経済新聞社、1976、86頁



濱田庄司使用の登り窯

* 画像引用元：『民藝』863号、
日本民藝協会、2024、17頁



濱田庄司 《白釉黒流描大鉢》 大阪市立東洋陶磁美術館蔵

* 画像引用元：世田谷美術館編『没後40年濱田庄司展』世田谷美術館、2018、66頁



濱田庄司 《柿釉鉄絵青差大鉢》 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：『余白』（2号）東京工業大学・中島岳志研究室、2024、7頁

- ・ 近代科学に使われないこと
- ・ 近代日本におけるオルタナティブな美の探究・牽引

4 アートと材料—塩釉を例に



濱田庄司 《塩釉櫛目色差茶碗》 大阪市立東洋陶磁美術館蔵

* 画像引用元：世田谷美術館編『没後40年濱田庄司展』世田谷美術館、2018、144頁



島岡達三 《塩釉象嵌縄文大皿》 益子陶芸美術館蔵

* 画像引用元：益子陶芸美術館ウェブサイト
(<http://mashiko-museum.jp/exhibitions/collection/shimaoka/02.html>)

・塩釉：もとは中世ドイツの古陶磁で用いられていた釉の一種で、焼成中の窯の中に塩を投入し、塩化ナトリウムの一部に急激な気化を起こすという手順で生じさせるものである。高温でガス化した塩の成分が、器体の素地の成分（珪酸分）と結びついてガラス質の釉膜に自然に変化し、柚子肌（柚子のような肌合い）を示しながら器体を覆う。

・「将に焚き上らうとする前に、食塩を投げ入れます。忽〔たちま〕ち音を立て、発散するのを聞かれるでせう。この時塩の中の塩素分が蒸発して逃げ、残るソーダ分が焼物の肌に当り、土の珪酸分その他と溶け合つて硝子体の釉を作ります。」

・「特長は、肌についた釉が皺状を成しておることではありますが、なぜさうなるかは、硝子窓に雨がかゝる様を想ひみて下されば一番分り易いでありませう。水の粒は表面張力によつて丸となり、それがより合つて大きくかたまりつゝ流れま

す。決して一度に均一には流れません。」

（『焼物の本』、1953—1954年執筆）

（『柳宗悦全集』第22巻上、筑摩書房、1992、282-283頁）



《塩釉髭徳利》（ドイツ）

濱田庄司蒐集品

（現・益子参考館蔵）

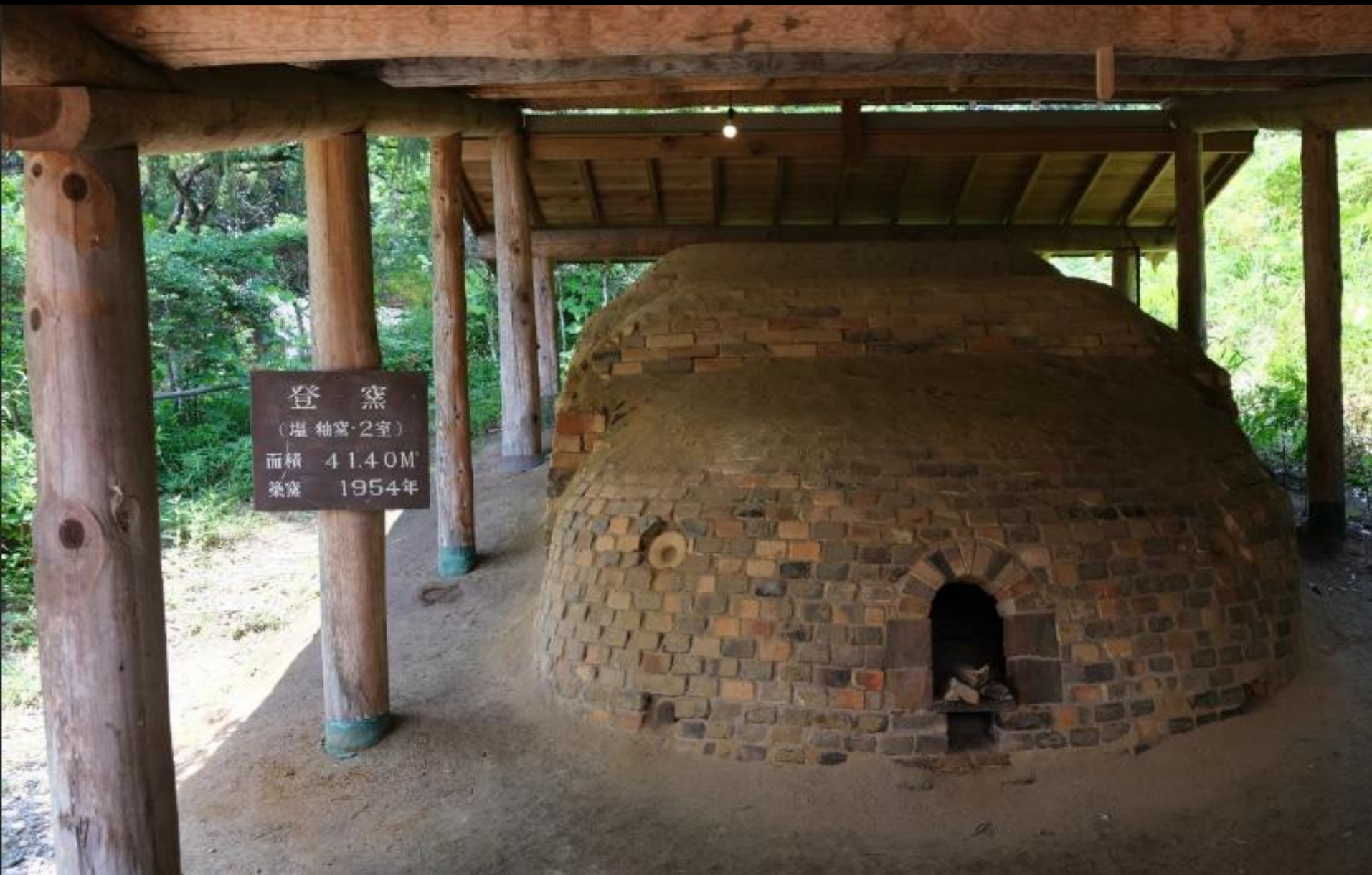
* 画像引用元：水尾比呂志ほか編

『益子参考館 3』学研、1979、40頁



《塩釉髭徳利》（ドイツ） 益子参考館蔵（発表者撮影）





登 窯
(塩 釉窯・2室)
面積 41.40M²
築窯 1954年

濱田庄司使用の塩釉窯（現・益子参考館内、発表者撮影）

・ 「〔引用者注・塩釉を〕ドイツ、フランス、それから飛んでアメリカのニューヨークの近くで見掛けました。登窯は横の小さな孔から火を焚くので、最初はどうやって岩塩をくべるのかと思っていました。〔略〕岩塩を紙に包んで小さな団子のように作り、バケツに入れて仕度をして置いて、頃を見計つて両方から一緒に投入れると、バリバリくと中で燃える音がして、まるで戦のように勇いものです。」

（濱田庄司ほか「民藝・伝統・生活—濱田庄司氏にもものを訊く—（一）」、
『民藝』25号、日本民藝協会、1955、15頁）

・ 〔濱田晋作（1929—2023）、当初の塩釉窯について：〕

「計算づくめでやったんですがね、全部だめ。一点も取れないんです」

（横堀聡・濱田晋作ほか「『濱田庄司と益子のこと』インタビュー③」、
『民藝』741号、日本民藝協会、2014、51頁）

・塩釉の技法は「原始的」 、「この荒々しさは長い経験で普通の窯ではそれほどの間違ひをしなくなつてきた私には、塩釉の窯の失敗つづきが何よりの気付け薬になると思ふ」

（濱田庄司「解説にかへて」、柳宗悦編『濱田庄司作品集』
朝日新聞社、1961、17頁）

・「その素朴で失敗の多い初期的の手法が五十年来手慣れていて、うっかりしやすい仕事の上に、たびたびよい眼醒しの役をしてくれた」

（濱田庄司『無尽蔵』朝日新聞社、1974、76頁）



濱田庄司 《塩釉櫛目色差茶碗》 大阪市立東洋陶磁美術館蔵

* 画像引用元：世田谷美術館編『没後40年濱田庄司展』世田谷美術館、2018、144頁



濱田庄司 《塩釉鉄砂注瓶》

国立工芸館蔵

* 画像引用元：独立行政法人国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム
(<https://search.artmuseums.go.jp/index.php>)

参考：現在の濱田窯の塩釉窯



現在の濱田窯の塩釉窯（以下、発表者撮影）



投入する塩



塩投入前の煙



塩投入後の煙



濱田窯



濱田庄司 《塩釉藍彩注瓶》

「濱田庄司新作陶展」案内はがき
(日本橋三越、1956) 掲載図版



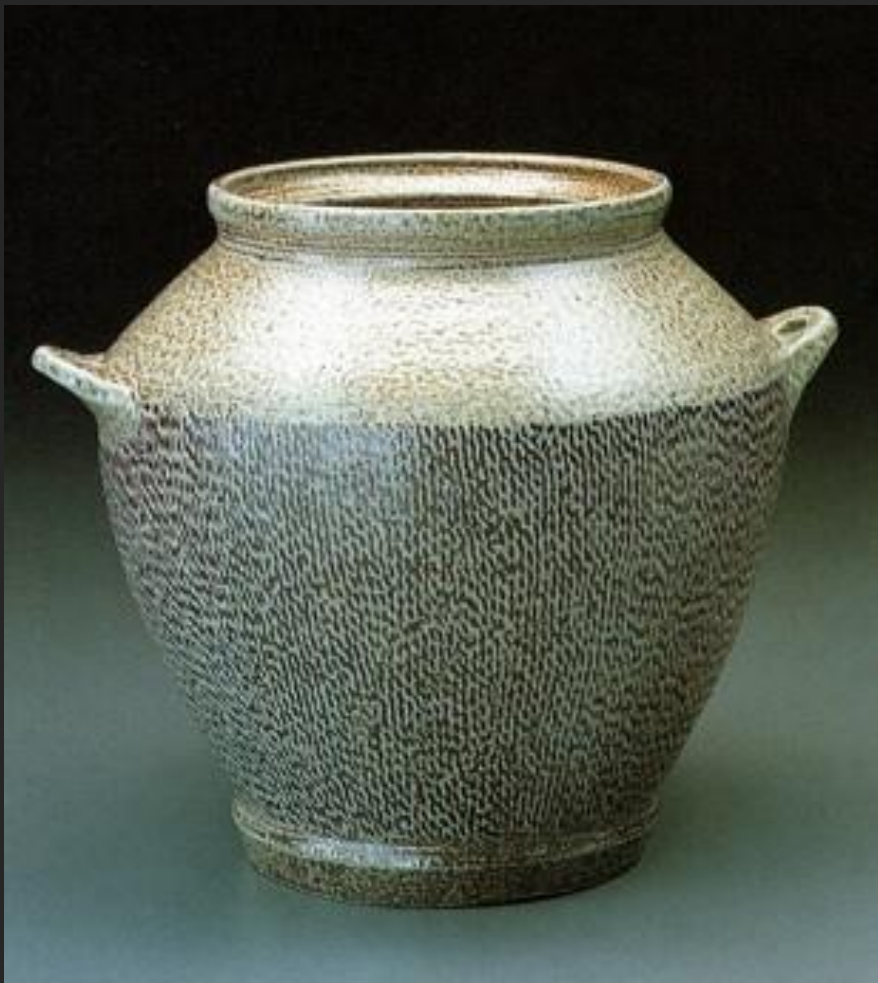
島岡達三と濱田庄司

* 画像引用元：『民藝』665号、
日本民藝協会、2008、13頁



島岡達三 《塩釉象嵌縄文大皿》 益子陶芸美術館蔵

* 画像引用元：益子陶芸美術館ウェブサイト
(<http://mashiko-museum.jp/exhibitions/collection/shimaoka/02.html>)



島岡達三 《塩釉象嵌縄文壺》

栃木県立美術館蔵



島岡達三 《塩釉象嵌草花文徳利》

東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：（左）文化遺産オンライン（<https://bunka.nii.ac.jp/>）

（右）栃木県立美術館ほか編『島岡達三展』栃木県立美術館、1994、102頁



島岡製陶所 登り窯

* 画像引用元：日本放送協会編『陶芸に親しむ』日本放送出版協会、1996、82頁



島岡達三 《塩釉象嵌縄文盃》 東京科学大学博物館蔵

* 画像引用元：文化遺産オンライン (<https://bunka.nii.ac.jp/>)

・「ある時紹鷗は利休に「春がくるから掃除しとけ」といいます。それで利休は幾度も掃いて、「よく掃きました」というと、「まだだ、もっとよく見ろ」と、いつまでたってもお許しが出ない。さすがの気のきつい利休でもまだそのときには10歳ですから、ベソをかいてしまって、「どうしたらいいのでしょうか。」と聞いた。すると紹鷗は、「もう掃くのはこれでいいのだ」と言い、きれいになったところへ、一ぱいに紅葉で美しくなっている樹を片手でゆさぶって、それで静かにきれいな葉が落ちて、「これで済んだ」と、そうやって教えたというのです。利休もそれですっかりまた目がよくなったということです。」

・「これは、岩波から出た『茶の本』という薄い叢書にいろいろ書いてあり、なかなかいい本だと思います」

* 濱田庄司講演、1974年6月25日、経団連クラブ・「第86回会員昼食会」。

佐々風太「柳宗悦の『無地の美学』」東京工業大学・博士学位論文、2024、122-123頁。

学校を出る前の年の夏休み、各地の窯を実際自分の目で見たいと思って、美濃を振り出しに瀬戸、万古、信楽、伊賀、京都、九谷の各地をひと回りした。蔵前の図案科を出てから、選科生として窯業科にも席があって親しかった各務鉦三君〔引用者注・ガラス工芸家。1896—1985〕が美濃出身のおかげで同君の家に泊まりながら何かと案内をうけた。

多治見あたりで、汽車の窓から一方に傾いた低い屋根がたくさん続いている風景が見えた。あれは何かと乗り合わせた人にたずねたら、「みんな焼きものの窯の屋根です」と教えられた。私は自分のえり元についている窯業科の窯の字をかくしたいと思うほど、恥ずかしかった。学校では登り窯の設計図は描いたが、学校の窯の図には屋根はないので、屋根つきの登り窯など見当もつかなかったのであった。

（濱田庄司『窯にまかせて』日本経済新聞社、1976、58頁）

- ・〔陶芸について〕「ほんとうは小学校出たぐらいから入るべき道ですからね」、「すべて手仕事というものは、若いときに体ごと入らなければならぬはずです」。
- ・〔それに早く気が付いたら窯業科へは進まなかったかと問われて〕「行かないですわ」。
- ・窯業科で学んだ科学は、若年から産地で作陶するという体験の「代理」に過ぎないもので、実体験に比べれば「程度の浅いもの」。

（濱田庄司ほか「この人とひととき 対談 浜田庄司さんとひととき」、
『葎前工業会誌』639号、葎前工業会、1969、34—35頁）

素木 昔、浜田庄司が、自分は蔵前に行ったから、その時間だけ遅れて損した
ということを行ったことあるんです。山田先生怒っちゃってね……。

島岡 何といひかなあ……、よくそういうこと先生はおっしゃることがあるん
です。本当はその意味が違ふと思うんです……。しかし、山田先生怒るの無理
ないわ（笑）。つまりそういうものを超えたところで仕事をしたいというお気
持があるわけです。人間のほうだと、人間のお手本というのは無心な状態で、
つまり知識なんか何もない人達が、無心で積み重ねて、繰り返し仕事をしたと
ころに、無心の美が生まれたといひのが、一つの根本になつていますんでね。
そういうところに仕事を持っていきたい。それには蔵前でいろいろな勉強をした
のが、逆に邪魔になつてゐるんだといひの意味だと思ひますが、それを超越し
たいといひのお気持があるわけです。それを常々おっしゃつてゐる。

（素木洋一・島岡達三ほか「座談会 陶芸アラカルト」、
『蔵前工業会誌』796号、蔵前工業会、1984、34—35頁）

島岡 〔略〕 先生のお仕事には、その蔵前での勉強が非常にプラスしていると私は思います。先生は頭のいい方だし、英国で暮らした方だから、物事を非常に合理的に考えるわけです。科学的な思考の仕方をなさる。それが邪魔してると、ご自分でお思いになるわけだ。実は邪魔してないんです。それはプラスになるんだけれどもー。

素木 乗り超えたい、と……。

（素木洋一・島岡達三ほか「座談会 陶芸アラカルト」、
『蔵前工業会誌』796号、蔵前工業会、1984、34—35頁）

浜田先生は1万種もの釉薬の研究で得た知識を捨て、益子で得る粘土や釉薬の原料を使い、益子で行われていた技術を用いて先生独自の芸術を作り上げられた訳ですが、しかしその根本には、やはり蔵前で勉強された科学的な思想や技法があり、それだからこそあれだけの成果をあげられたのだと思います。〔略〕手仕事の中の高度の化学工業として焼き物の歴史がある訳です。だから先生には、こうなればこうなるといふ原因を追求する科学的思考があったからこそ、色々な新しい手法などが生まれてきたものと思います。

（島岡達三「焼き物 伝統と新しい技術の接点を求めて」、
『蔵前工業会誌』910号、蔵前工業会、1995、819頁）

5 まとめにかえて

- ・ 近代科学に使われないこと
- ・ 近代日本におけるオルタナティブな美の探究・牽引

- ・ 近代科学に使われないこと

- ← 窯業科時代の学習・研究がその基礎になった

- ・ 近代日本におけるオルタナティブな美の探究・牽引

- ← 東京高等工業学校／東工大だからこそ可能になったのでは

- ← 窯業科と文芸や工業図案科の近接も無視できない

- ・ 民藝運動の制作・思想の基礎としての、

- (= 「民藝」前夜の場所としての) 東京高等工業学校／東工大

補足① 文理共創をめぐるって



「文理共創科目・民藝」 (2024年度3Q)

補足② 博物館の可能性

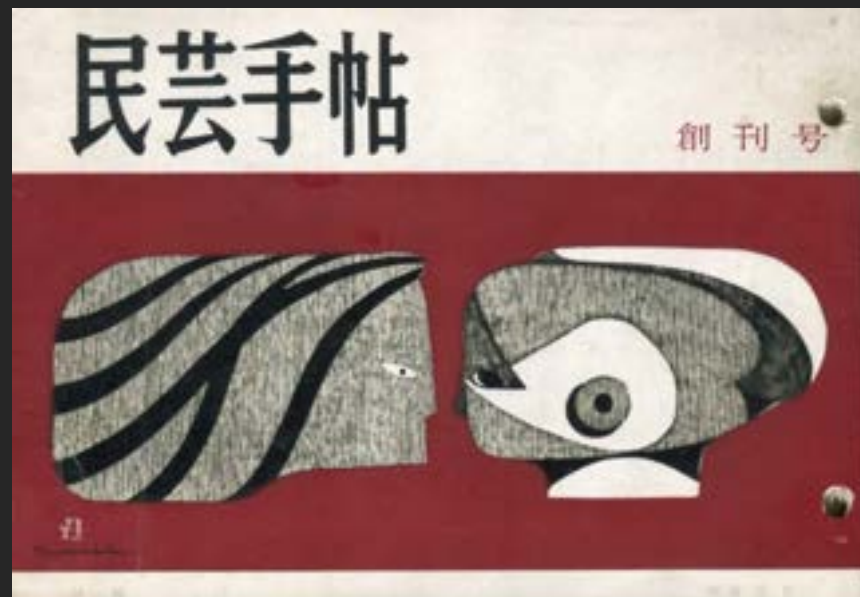


東京科学大学 博物館・百年記念館

白崎俊次撮影写真アーカイブ



白崎俊次（1921–1984）



『民芸手帖』創刊号（1958年6月号、
東京民藝協会）

* 画像引用元：東京民藝協会ウェブサイト
(<https://shirasakishunjipphoto.stores.jp/items/66ab3436a3a20c016c6d3d59>)



白崎俊次撮影写真
(益子・島岡窯)



白崎俊次撮影写真
(益子)



白崎俊次撮影写真（益子）